

# 明治音楽教育資料研究(その1)

下伊那郷土館の唱歌歌詞草稿について ①

Study of Musical Education in Meiji Period

馬 場 健

＜ワタシノガクカウヨイガクカウヨ、ケウジャウヒロイ、ニハヒロイ、カケヅヤ、ゴホンヤ、イロイロナ メーヅラシイモノタクサンアッテ。

ワタシノセンセイヨイセンセイヨ、ワタシタチヲカハユガリ、ヨミカキサンジュツ、イロイロナ ヨイコトヲシヘテクダサイマシテ。

ワタシノトモダチヨイトモダチヨ、マイニチナカヨク、ゲンキヨク、イウギヤナニカー、イロイロナ、オーモシロイコトイツシヨニヤッテ。

これが、子供が学校に入って、初めて教はる唱歌である。驚かざるを得ない。学校とは果しかういふ形式的な、而して非芸術的な動きのとれない凝固体であらうか。私はこの唱歌を読むと何の表情もない紙製の先生や、生徒やが糊附けになってボオル紙の上に並ばされた、雅味も何にもない玩具の家が眼に浮かんで来る。血が通ってゐない。息が、弾んでゐない。命が、躍ってゐない。澆刺として自由で真純で素朴な児童の世界がない。……＞

これは、もうよく知られているように、北原白秋が、大正10年の《芸術自由教育》11月号に<sup>(1)</sup>発表した《小学唱歌々詞批判》の1節である。この文章中に引用されている歌詞は、白秋によると、小学唱歌教授研究会編《改版増補新案小学唱歌帖》全8冊<sup>(2)</sup>（大正10年版）の尋常科第1学年用の＜その1＞《学校》と題する歌で、当時、彼の住んでいた小田原の小学校で使われていたものだという。現物が手許にないので、いろいろと確認できないことが多いが、それにしても、なんとも驚いた代物である。しかし、一方で、＜学校唱歌＞というものに付与されていた特質の一面を、これほど端的かつ極端に示した例も少ないだろう。＜学校唱歌、校門を出でず＞の見本のようなものである。

もうひとつの例を挙げてみよう。

＜（幼稚園用ノモノ）

勤ムレバ則チ余アリ

Franklin Sq. 25

明治音楽教育資料研究（その1）

茲ニ我々ハ毎日学校ニ集リ結構ナル教ヲ学ブ誠ニ面白クシテ退屈スル事ハナシ我々カ学校ニ  
於テ学ブトコロハ此ノ如シ

教課ハ済ミ各ノ者が笑ヒナガラ遊ヒ歩行キ居ル楽シキ遊ビ仲間面白キ仲間ナリ我々ガ学校ニ  
於テ遊フトコロハ此ノ如シ

我々ハ勤メタリ遊ヒタリスル為ニ毎日学校ニ集リ勤メモ遊ビモ勇シテ為セリ退屈セズシテ誠  
ニ面白ク日ノ西ニ落ルマテ

たのしわれ まなびもをへ  
日もくれぬ  
あすもまた 朝とくより  
まなばまし  
かくて年月 たえせざらば  
つきの桂も われぞをるべき  
又  
うれしわれ 事業もはて  
日もくれぬ  
あすもまた 朝とくより  
つとめまし  
かくて年月 たゆまざらば  
竜の腮の 玉もとるべし>

前出の白秋の引用した歌と、なんと発想法の似ていることであろう。これは、長野県伊那市にある上伊那郷土館に保存されている《伊沢修二資料》<sup>(3)</sup>の中にある唱歌歌詞の草稿のひとつである。伊沢修二は、周知の如く、日本の音楽教育の創始者ともいべき人物であり、明治12年に設立された＜音楽取調掛＞の責任者として、わが国で最初の公的な音楽教科書ともいべき《小学唱歌集初編～第3編》および《幼稚園唱歌集》編纂の中心人物であった。伊沢の郷里、高遠に程近い上伊那郷土館には、これら唱歌集の歌詞草稿とおぼしき文書が、断片的ながら、かなり残されている。前掲の草稿は、そのひとつで、内容からみて《幼稚園唱歌集》のためのものであり、＜Franklin Sq. 25＞という記入から、出典が、取調掛の参照したアメリカの唱歌集《Franklin Square Song Collection》であったことを示唆している。署名はないが、筆跡からみて、筆者は取調掛の里見義であろうと思われる。この文書の初めの散文は、外国曲の歌詞を直訳したものであり、後の韻文は、そこから日本語の歌詞を、音楽の拍節に合わせて作ったもので、二つの案を掲げていることになる。このような作詞法を示す草稿は、上伊那郷土

館にいくつかある。それについては後に述べるが、この歌詞の内容もまた、白秋が烈しく批判した＜非芸術的な、動きのとれない凝固体＞といってよいであろう。

それでは、＜学校唱歌＞とは、何であったのだろうか。＜学校唱歌、校門を出でず＞といわれるとき、その批判の対象は、主として、いわゆる＜文部省唱歌＞である。＜文部省唱歌＞という場合、ふつう明治44年から大正3年にかけて出版された《尋常小学唱歌》と昭和7年の《新訂尋常小学唱歌》、さらに昭和16～7年の《ウタノホン》《初等科音楽》等の国定教科書に収録されている唱歌をさす。しかし、この中にも、明治10年代に音楽取調掛によって作られた前記の四つの唱歌集から採られたものもある。また、＜文部省唱歌＞は、批判を浴びる一方で、あの＜兎追いし…＞で知られる《ふるさと》をはじめ、多くの人になつかしがられ、現在でも歌われているものも少なくないのである。

ここでは、《小学唱歌集初編～第3編》や《幼稚園唱歌集》に触れる前に、そこに至る経過をごく簡単に概観しておく。

周知のように、学校教育の教科に＜唱歌＞を加えることになった最初は明治5（1872）年の《学制》において、＜下等小学教科＞に＜唱歌＞、＜下等中学教科＞に＜奏楽＞が置かれたことによるが、それにはそれぞれ＜当分之ヲ欠ク＞＜当分欠ク＞という但書がつけられていた。この但書は、直ちに実施することの困難を示しているばかりではなく、＜唱歌＞や＜奏楽＞の何たるかを十分理解できていない学制取調掛員たちの困惑をも示唆しているように思える。少なくとも現在、この《学制》の中に、なぜ＜唱歌＞や＜奏楽＞が加えられることになったのか、解明されていない。

明治6年、22歳で、新設の愛知師範学校長となった伊沢修二は、明治8年、文部省から＜師範学科取調ノ為メ＞アメリカに派遣され、ボストン近郊のブリッジウォーター師範学校に留学した。伊沢は、そこで、ボストン公学音楽監督ルーサー・ホワイティング・メーソンを識り、初めて音楽の手ほどきを受けると同時に、日本で音楽教育を開始するための構想と教材の試作を行なっている。そして明治11年4月8日付で、伊沢は、留学生監督官、目賀田種太郎と連名で、《学校唱歌ニ用フベキ音楽取調ノ事業ニ着手スベキ、在米国目賀田種太郎、伊沢修二ノ上申書》<sup>(5)</sup>を、文部大輔、田中不二麿に送った。その中で、二人は、音楽教育の必要を説き、その効用を次のように説明している。

＜現時欧米ノ教育者皆音楽ヲ以テ教育ノ一課トス、夫レ音楽ハ学童神氣ヲ爽快ニシテ其ノ勤學ノ勞ヲ消シ、肺臟ヲ強クシテ其健全ヲ助ケ、音声ヲ清クシ、発音ヲ正シ、聴力ヲ疾クシ、考思ヲ密ニシ又能ク心情ヲ楽マシメ其ノ善性ヲ感發セシム是レ其ノ学室ニ於ケル直接ノ功力ナリ、然シテ社会ニ善良ナル娯樂ヲ与ヘ、自然ニ善ニ遷シ罪ニ遠カラシメ、社会ヲシテ礼文ノ域ニ進マシメ、国民揚々トシテ王徳ヲ頌シ太平ヲ樂ムモノハ其社会ニ対スル間接ノ功力ナリ……＞

ここで注目すべきなのは、＜学童神氣ヲ爽快ニシ＞たり、＜勤學ノ勞ヲ消シ＞たり、＜其健

### 明治音楽教育資料研究（その1）

全ヲ助けたり、＜考思ヲ密ニシ＞たりする学童に対する直接の効用を第一に挙げ、＜自然ニ善ニ遷シ罪ニ遠カラシメ＞たり、＜社会ヲシテ礼文ノ域ニ進マシメ＞たり、＜国民揚々トシテ王徳ヲ頌シ＞たりする効用を間接のものとして、後に置いている点である。ところが、それから僅か3年半後の明治14年11月、伊沢は、《小学唱歌集初編》の《緒言》で、次のように書くことになる。

＜凡ソ教育ノ要ハ徳育智育体育ノ三者ニ在リ而シテ小学ニ在リテハ最モ宜ク徳性ヲ涵養スルヲ以テ要トスヘシ……＞。

この3年半ばかりの間に、何があったのだろうか。

明治11年4月の伊沢らの上申のあと、1年半を経て、明治12年10月に、ようやく＜音楽取調掛＞が発足することになる。伊沢は東京師範学校長兼任のまま、御用掛となった。伊沢は、ただちに10月30日付で《音楽取調ニ付見込書》<sup>(6)</sup>を文部卿寺島宗則に提出した。これは、＜音楽取調掛＞が行なうべき事業の具体的な計画書であると同時に、新しく興す日本の音楽教育の展望をも含んでおり、その意味で重要な文書である。その中で伊沢は、＜世ノ音楽ノ事ヲ談スル者ノ言ヲ聞クニ其説概ネ三アリ 甲説ニ曰ク音楽ハ人情ヲ感発スルノ要具ニシテ喜怒哀楽ノ情自ラ其音調ニ顯ル、者ナレハ洋ノ東西ヲ問ハス人種ノ黄白ヲ論セス苟モ人情ノ同キ所ハ音楽亦同シテ可ナリ抑西洋ノ音楽ハ希臘ノ哲人ピサゴラス以来数千年間ノ研究ニヨリテ殆ント最高点ニ達シタルモノナレハ其精其美素ヨリ東洋蛮楽ノ及フ所ニ非ス故ニ其良種ヲ択テ之ヲ我土ニ移植ス可シ何ソ不十分ナル東洋楽ヲ培育完成スルノ迂策ヲ求ルヲ要センヤト 乙説ニ曰ク各国皆ナ各国ノ言辭アリ風俗アリ文物アリ是レ其住民ノ性質ト風土ノ情勢トニヨリテ自然ニ産出セシモノナレハ人力ノ能ク之ヲ変易スベキニ非ス且音楽ノ如キハ素ト人情ノ発スル所人心ノ向フ所ニ從テ興リタルモノナレハ各国皆固有ノ国楽ヲ保有ス未タ全ク他国ノ音楽ヲ自国ニ移入セシノ例アルヲ聞カス是ニ由テ之ヲ見レハ我國ニ西洋ノ音楽ヲ全然移植セントスルハ恰モ我国語ニ代ルニ英語ヲ以テセントスルカ如ク到底無益ノ論ト云ハサルヲ得ス故ニ我固有ノ音楽ヲ培育完成スルニ如カズト 丙説ニ曰ク甲乙ノ二説各其理ナキニ非スト雖モ皆偏奇ノ極ニ陷ルノ弊ヲ免レス故ニ其中ヲ執リ東西二洋ノ音楽ヲ折衷シ今日我國ニ適スベキモノヲ制定スルヲ務ムベシト 愚ヲ以テ之ヲ見レハ丙ノ説ク所其当ヲ得タルモノニ似タリト雖モ其実施ノ方法ニ至リテハ難中ノ至難ナル者ト云ハサルヲ得ス然リト雖モ既ニ丙説ヲ以テ至当ト認ル以上ハ吾人今日ノ知識ト時勢トニ相應セル手段ヲ以テ将来其目的ヲ達スベキ方法ヲ設ケサル可ラス若シ其難ヲ恐レテ今日之ニ着手セザレハ何レノ日カ其興ルヲ期スベケンヤ……＞と書き、西洋の音楽をそのまま輸入するのではなく、また日本もしくは東洋の音楽を＜培育完成＞するのではなく、＜東西二洋ノ音楽ヲ折衷＞する方法が至当であるとしている。以後、折衷の方法にいろいろと問題はあるにしても、出発点において、伊沢が西洋音楽をそのまま移入しようとは考えていない点は重要である。

伊沢はさらに続けて、〈…實際取調フベキ事項大綱三アルベシ〉として〈東西二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ル事〉〈将来国楽ヲ興スベキ人物ヲ養成スル事〉〈諸学校ニ音楽ヲ実施スル事〉の3項を挙げている。これら3項目は、8年間にわたる〈音楽取調掛時代〉に、曲りなりにも実現されてゆくことになる。ここでは、教材の作製、つまり具体的には《小学唱歌集初編～第3編》《幼稚園唱歌集》として具体化する第1項が問題である。

＜第1項東西二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ル事＞

凡ソ物ヲ折衷スルハ二物ノ異ナル点ト同キ点トヲ見出シ其同キハ之ヲ合シ其異ナルハ双方ヨリ漸ク相近ケテ遂ニ相和セシメルニ在リサレバ折衷ノ第一歩ハ先ツ東西二樂ノ異点ト同点トヲ発見スルニ在ルベシ

今西洋ノ時様歌ト日本ノ端唄トヲ取り之ヲ比較セハ頗ル異点多シテ殆ト同点ナキカ如クナルベシ次ニ西洋ノ神歌ト日本ノ琴歌トヲ比較セハ二者異ナラザルニ非スト雖モ頗ル同趣ノ存スルヲ見ルベシ終ニ西洋ノ童謡ト日本ノ童謡トヲ比セバ全く相同キノ想ヲナス是レ他ナシ西洋ノ音楽モ日本ノ音楽モ之ヲ組成スル元素ハ毫モ異ナルニ非ス唯其結合ノ法同ラザルノミ故ニ童謡ノ如キ其結合簡短ナル者ニ在テハ変至テ少ケレドモ時様唄ノ如キ其結合愈綜錯ナルニ從ヒ其変モ愈多キヲ加ルナリ

右ノ理由ナルヲ以テ着手ノ始ニ当テハ童謡其他最も簡単ナル謡類ヲ集メ西洋ノ童謡ニ比較シ二者折衷シテ相当ノ歌曲ヲ作り将来小学生徒ニ授ルノ資トスベシ右目的ヲ達スルニハ西洋音楽ニ精キ者及日本音楽ニ精キ者等ヲ採用シ彼我異同ノ諸点ヲ考究シ協議折衷ノ上漸々新曲ヲ作出スルヲ務ム可シ＞

つまり、この文書では、伊沢は、もはや音楽教育の目的や効用を説くことなく、むしろ具体的な方法論を展開しているのであり、教材の作製に当っては、とくに〈童謡〉のような〈其結合簡短ナル者〉によって、〈東西二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ル〉という基本姿勢を打出しているのである。

では、その基本姿勢が、どのようにして具体化してゆくか。それを考察することは、明治前期の日本の音楽教育史の研究の重要な課題のひとつである。それは、より具体的には、前記の4つの《唱歌集》の編纂の過程を、できるかぎり詳細に追ってゆくことである。その際、いくつかの段階に分けて考察することが可能であろう。

そのうち、現在、芸大附属図書館に残されている音楽取調掛時代の資料は、音楽取調掛において作製された唱歌教材、とくに歌詞が文部省との間で幾度も論議され、修正を加えられ、次第に確定されてゆく過程を、かなり詳細に伝えてくれる。その文書を些細にみてゆくと、音楽取調掛の唱歌教育に対する姿勢と文部省のそれとの相違や、それが微妙に移り変ってゆく様相がみてとれて興味深い。しかし、その過程については、すでに他に詳細な研究があるので、ここでは、一応、それにゆずりたい。

問題は、それ以前の過程である。すなわち文部省に提出する以前に、音楽取調掛の内部で、

## 明治音楽教育資料研究（その1）

如何にして楽曲が選択され、日本語歌詞が作製されていったか、である。この点に関して、現在われわれに残されている資料は余りに乏しい。

そこで問題になるのは、まず第一に、音楽取調掛が《唱歌集》の編纂に当って、何を参照したか、である。つまり出典および原曲を明らかにすることである。当然のことながら、原作者名、原作者名をつきとめることをも含んでいる。<sup>(8)</sup>

次に、原曲（原詩の内容をも含む）と《唱歌集》記載の楽曲との異同を明らかにすることである。

さらに、外国曲から採用された場合、原詩と日本語歌詞の関係、すなわち翻訳であるか、日本の既存の詩であるか、新たな作詩であるかの問題である。そこには、当然、日本語歌詞の作詞者の問題も含まれる。

これらの諸点を、入手し得るかぎりの資料から実証してゆく必要があるが、ここでは、これまでの研究の結果に基づいて、《小学唱歌集初編～第3編》所収の全91曲についてまとめた一覧表を、〔別表1〕として掲げた。この表をみても判るように、不明の点が少なくない。例えば、現在も歌われている《あふげば尊し》は、出典も原曲も日本語作詩者も、一切判明していないのである。

一覧表の個々の項目の検討はひとまず措いて、ここでは、いくつかの資料を紹介しておきたい。それは上伊那郷土館所蔵の歌詞草稿である。それらは、外国唱歌が選択されてから日本語の歌詞が作製されてゆく過程を示すものである。そのうち、よく知られている草稿は次のものである。

### 〔C〕

チ ク サ ヤ チ ク サ  
ちくさやち草  
ムシ ノ ネ モ  
虫の音も  
カ レ テ サ ビ シ ク  
かれてさびしく  
ミ ユ ル リ ナ  
みゆるかな  
ヤ オ ア ハ レ ア ハ レ ヤ ミ ヨ ミ ヨ  
や あはれあはれ やみよみよ  
ヒ ト リ ニ ホ ヘ ル キ ク ノ ハ ナ  
ひとりにはへる 菊の花

### 二

シ モ ノ シ タ ニ テ ニ ホ フ ナ リ  
霜の下にて にはふなり  
ユキ ノ シ タ ニ テ カ ラ ル ナ リ  
雪の下にて かをるなり  
ヤ オ ア ハ レ ア ハ レ ヤ ミ ヨ ミ ヨ  
や あはれあはれ やみよみよ  
コ レ ゾ ヤ チ ヨ ト キ ク ノ ハ ナ  
これぞ八千代と きくの花

### 三

チ ク サ ハ カ レ テ  
千草はかれて

ノチモナホ  
後もなほ  
シモニオゴレル  
霜におごれる  
キクノハナ  
菊のはな  
ヤオアハレアハレ ヤミヨミヨ  
や あはれあはれ やみよみよ  
ヒトノミササセ カクチコソ  
ひとのかがみと なりにけり

〔B〕

11月10日 (Franklin (148))

七 (三四) 五 (三二)

七 (三四) 五 (三二)

七 (一六(三二)) 五 (一四(二二))

七 (三四) 五 (三二)

〔A〕

＜夏ノ最終ノ薔薇 (殿モ美ナルモノ)＞

一本ノミ咲キ残り居ルハ

夏ノ最終ノ薔薇ナリ

彼ノ愛ラシキ仲間ハ

皆ナ散リ去セタリ其親類

ノ花モ花ノ実モ一ツモ見得ス<sup>(ヌカ)</sup>

此最終ノモノヲ慰メヌハ

独リ残り居ルヲ憐ム為ニ

見当テベキモノモナシ

・

我ハ汝ヲ独リコゝニ見捨テ得ズ

幹ニ於テ其独リ凋ムヲ思ヘ

ヤルナリ 如何トナレバ美シキ友ダチ

ハ皆散失ヒ汝モ物ニ然ント

スレバナリ 故ニ我ハ汝ノ

葉ヲ取りテ汝ノ庭友等ノ

散布セルトコロヘ散布スベシ

・

友愛ノ絶ヘタルトキ我モマタ

然ルベシ而シテ愛ノ輝キノ

中ヨリ実子ハ落果テリ  
真心ノ凋ミタルトキハ皆然ル  
ベキノ理ナリ我カ愛スル  
者ノ風ト失セタルトキハ皆然  
ルベキノ理ナリ 嗚呼  
此ツレナキ世ノ中ニ  
独り住ミ得ル者ノ性  
ナルベキヤ>

草稿は〔C〕〔B〕〔A〕の順に書かれているが、成立の順序としては、当然、逆である。これは一読として判るように、原詩に基づいて〔A〕が翻訳され、ついで楽曲の拍節に合わせて〔B〕の韻の数がきめられ、その〔A〕〔B〕に基づいて、日本語の歌詞が作られて行った過程を示している。<sup>(9)</sup> いうまでもなく名高い“The Last Rose of Summer”から、《小学唱歌集第3編》第78曲《菊》の歌詞が作製された過程である。ただし、この歌詞は、その後、さらに修正されて、〔譜例1〕のようになった。<sup>(10)</sup> 作詞者は、草稿の筆跡からみて、音楽取調掛の里見義である。<sup>(11)</sup>

山住正己《唱歌教育成立過程の研究》は、この《菊》の草稿を、作詞過程を示す唯一の例として挙げているが、上伊那郷土館には、この種の草稿の断片がかなり多く残されている。ただそれを復元するのはかなり困難であり、完全な形で保存されていたのは、《菊》1曲だけである。しかし昭和46年、上野学園大学学生、白須栄子によって、いくつかの草稿の復元に成功した。<sup>(12)</sup> 〔別表1〕の<歌詞草稿>という欄は、〔A〕〔B〕〔C〕の各段階の復元状態を示す。そのうちから《第3編》第54曲《雲》の〔A〕〔B〕段階を掲げる。

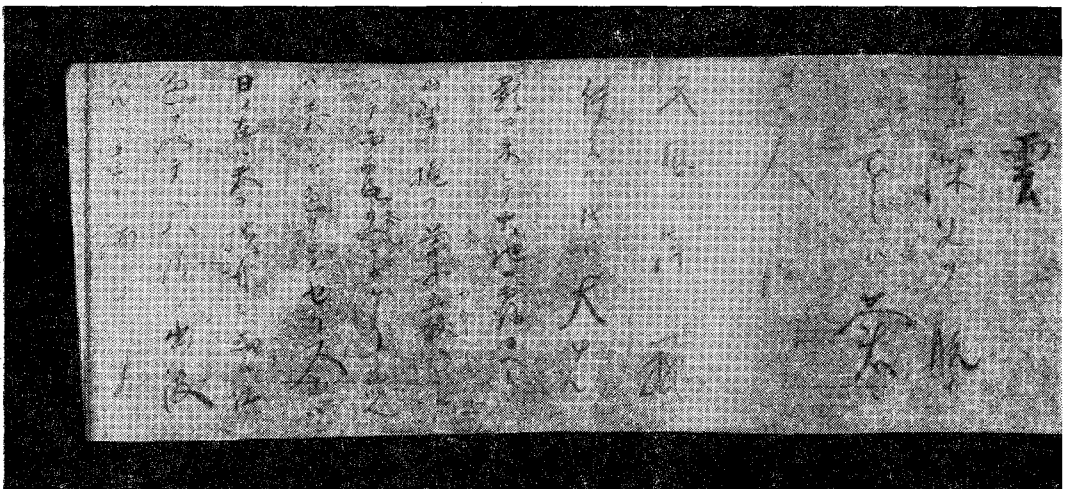
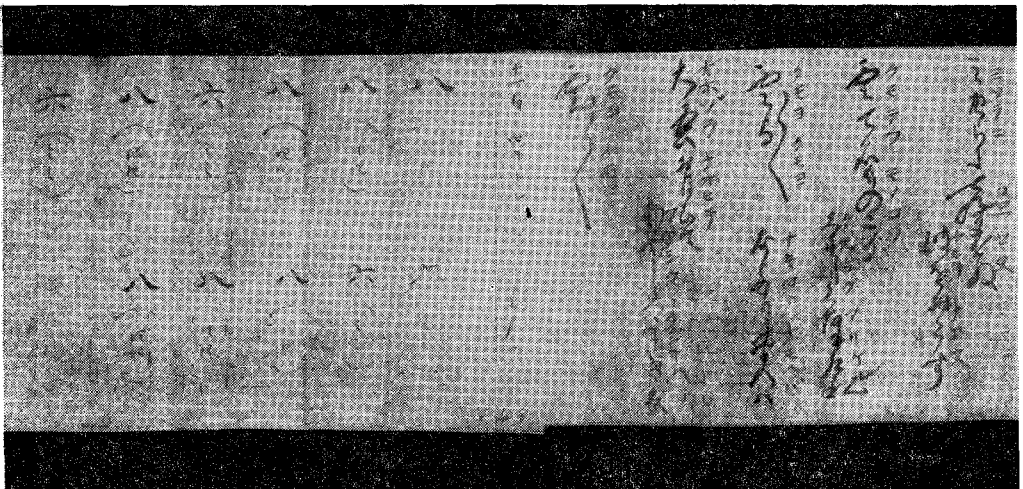
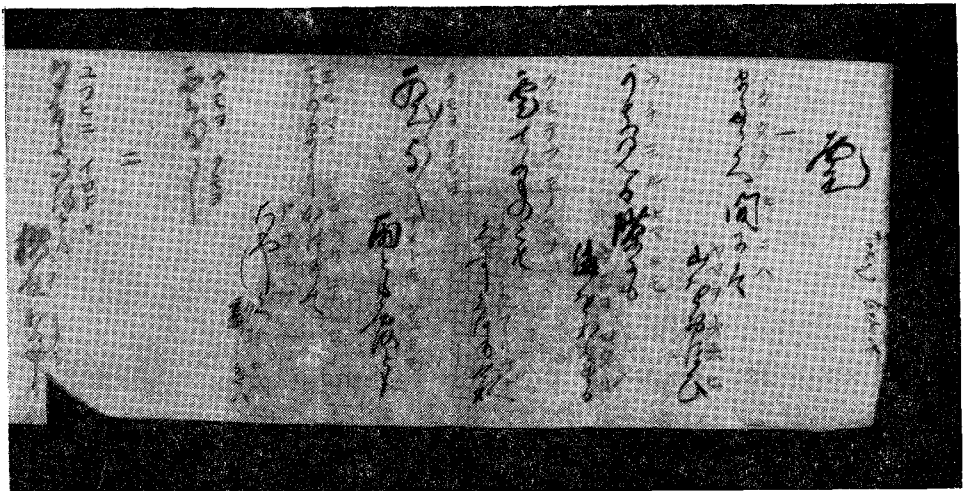
<11月24日「トレーニングスクールソングブック」43

八（四，四） 六（三，三）  
八（四，四） 六（三，三）  
八（四，四） 八（四，四）  
六（三，三） 八（四，四）  
八（四，四） 八（四，四）  
六（三，三）

雲

高山深谷ヲ航行  
スルトコロノ雲ハ蒼々





タル天ニ浮ベリ  
又風ヲ得テ飛  
行スルトキハ大ナル  
影ヲ来シテ大地ヲ覆ヘリ  
山野ヲ掩フ草木五穀ハ雲中ヨリ降ル雨露ヲ喜ヲ  
以テ吞享ケリ<sup>ニジ(ママ)</sup>両兄  
ハ美シキ色ヲ呈セリ又或ハ  
日ノ在ル天ヲ横行シ或ハ紅  
色ヲ以テ太陽ノ出沒  
スルトコロヲ飾セリ>

この草稿から、この曲の出典がおそらく“The Training School Song Book”であることが推定されるし、遠藤氏は、＜英国の歌曲作家カルコウト（カルコット）John Callcott (1776～1821年)の作曲，作詩は W. SugdenでThe clouds that sail o’er hill and dail が原歌である。＞としている。これによって〔A〕が“The clouds…”の直訳であることが、ほぼ確実に判る。《小学唱歌集第3編》に収録された完成稿は〔譜例2〕のようなものである。

白須栄子によって復元された草稿は、《雲》のほか、完全な形のものに《船子》、一部欠けたものに《鷹狩》があり、〔A〕を欠いたものが8曲ある。

しかし、この他に、《小学唱歌集初編～第3編》や《幼稚園唱歌集》には結局採用されなかった草稿がかなり残されている。前に挙げた《勤ムレバ則チ余アリ》は、その1例である。

ここではもう1編、おもしろい例を挙げておく。

＜乳屋の歌

ちゝやちゝやと 七三四  
うりてくるなり 七三四  
いざのめこども 七三四  
あしたははやく 七三四

○

ちゝは乾らく  
また菓子にも  
茶にさへ<sup>まじへて</sup>いれて  
のむよりよけれ

義艸

9月29日

Music for Nursery

No. 14

（幼稚園用ノモノ）

七（三四） 七（三四）

八（四四） 七（三四）

又ハ七（三四）

乳ヤノ<sup>カカア</sup>婆々ノ歌

息<sup>マメ</sup>才ヤカナル乳ヤ

ノ婦人カ見ヘル

天<sup>テ</sup>頭上ニ桶ヲノセ

ブリキニ白キ乳ヲ下ゲ

我等ガ茶ニ入ル

斗リニシタルモノヲ

・

乳ハ乾酪ニモ

菓子ニモマタ

パンニ付ケル

バターニモ入ル

モノナリ>

（大学音楽学部 助教授）

注

- （1）全文は、《音楽教育研究》昭和48年2月号（音楽之友社）の資料特集《唱歌教育の歴史》に再録されている。
- （2）この教科書は、《日本教科書体系近代編第25巻唱歌》（昭和40年講談社）巻末の《唱歌教科書総目録》には記載されていない。
- （3）長野県伊那市桜町 上伊那郷土館（社団法人上伊那教育会）
- （4）音楽取調掛設立までの伊沢修二の履歴及び業績については拙稿《日本の音楽教育・人間とその軌跡 伊沢修二 その1～6》（《音楽教育研究》昭和46年4～10月号。以下《伊沢修二》と略記。）を参照されたい。
- （5）この文書は、東京芸術大学附属図書館の《音楽取調掛時代資料》にある。芸大附属図書館編《音楽取調掛時代 所蔵目録（2）文書綴》の《2 音楽取調所書類 1》（以下《所蔵目録》と略記。なお、取調掛時代の文書綴は、すべてマイクロフィルム化されて閲覧することができる。）前記の文書は、拙稿《伊沢修二その4》に全文掲載されている。
- （6）《所蔵目録（2）文書綴》の《2 音楽取調所書類 38》。また伊沢自筆の草稿（朱筆訂正入り）が上伊那郷土館にあり、それは拙稿《伊沢修二 その6》に紹介されている。
- （7）この過程については、山住正己《唱歌教育成立過程の研究》（昭和42年、東京大学出版会）が、詳

## 明治音楽教育資料研究（その1）

しく扱っている。この研究は、芸大附属図書館の資料を中心に、驚くほど広範かつ綿密な原資料の漁渉と考証に基づいたもので、明治前期の音楽教育史研究の画期的な業績のひとつである。

- (8) 出典として、現在確実に判明しているのは、  
L. W. Mason : National Music Reader, 3vols.  
L. W. Mason : National Music Chart, 4vols. の2種である。(以下、NMR, NMC と略記)。  
また遠藤宏《明治音楽史考》(昭和23年・有朋堂)によれば、“The Training School Song Book”  
“The Franklin Square Song Collection” の2種が使われているが、目下、芸大図書館にも、上伊  
那郷土館にも見当たらない。
- (9) 〔C〕のあとに、カタカナ表記の歌詞がもう一度書き直されているが、省略した。
- (10) 《小学唱歌集第3編》では《菊》であるが、のちに《庭の千草》の表題で知られるようになった。
- (11) 里見義その他の作詞者については後述。
- (12) 昭和46年度上野学園大学卒業論文、白須栄子《「小学唱歌集初編～第3編」作成の過程》。
- (13) 遠藤宏・前掲書。
- (14) 草稿の〔C〕と完成稿の相違は、第1聯の＜雨とも霧とも＞が＜雨とも露とも＞に変わっているだけである。

〔譜例 1〕

[illegible]

〔譜例2〕

2. タダクも マニハヤ マラオホ し ちメルと  
 3. ふねにい ろどるは しをあた し めらにて

マニモウ ミアワター ル クーモアチモー フコサク  
 花せぬな みをおー ー ムーもてふもー のてん

スシクアリケレク モヨ クモヨ ナ イトモキ リトモ  
 ナしんぬ ぞけれん もよ んも な きうどお も ぬば

ルマニカ ハリチア アシシクナ レキハク モーヨークモ  
 花ぞらぬ 花いてあ やしんぬ しきはら もーヨークモ よ

# 《小学唱歌集》初編～第3編一覽表

	曲名	調	拍子	声部	作詩者	作曲者	出典資料	原曲名	歌詞草稿	備考
	(初編)									
1	かをれ	C	3/4	単	稲垣千頌		NMR II・NMC II			
2	春が山	〃	〃	〃	〃		〃			
3	あがれ	〃	〃	〃	稲垣千頌?		〃			
4	いはへ	〃	〃	〃	稲垣千頌		〃			
5	千代に	〃	〃	〃	〃		〃			
6	和歌の浦	〃	〃	〃	〃		〃			
7	春は花見	〃	〃	〃	〃		〃			
8	鶯	〃	〃	〃	〃		〃			
9	野辺に	〃	3/4	〃	〃		〃			
10	春風	〃	3/4	〃	〃		〃			
11	桜紅葉	〃	3/4	〃	〃		〃			
12	花咲く春	〃	〃	〃	〃		〃			
13	見渡せば	〃	〃	〃	柴田清照・稲垣千頌	J. J. ルソー?				
14	松の木陰	〃	〃	〃	〃		NMR II・NMC II	Trust in God		
15	春のやよひ	〃	〃	〃	慈鎮和尚(今様)					
16	わが日の本	〃	〃	〃	〃					
17	蝶々	〃	3/4	〃	野村秋足・稲垣千頌		NMR I・NMC II	The Boat Song		
18	うつくしま	〃	3/4	〃	稲垣千頌	スコットランド曲		The blue bell of Scotland		
19	関の板戸	〃	〃	〃	稲垣千頌		NMR II・NMC II	Morning Song		
20	蜜	G	〃	〃	〃	スコットランド曲		Auld Lang syne		
21	若葉子	F	〃	〃	稲垣千頌	ネーグリ	NMR I・NMC I	The Violet		
22	ねむれよ	〃	〃	〃	〃					
23	君が代	D	〃	〃	古今集(読入不明)源頼政	ウェブ		Glorious Apollo		
24	思ひづれば	G	3/4	〃	里見義					
25	薫りにしるる	F	3/4	〃	里見義	グレゴリオ聖歌?				
26	隅田川	G	〃	〃	加部巖夫	ヘイドン(ハイドン)?		Brightly green of our Banner	B	
27	富士山	〃	〃	〃	〃		NMC III	Murmer gentle lyre		
28	おぼろ	C	〃	〃	〃	イタリア・シシリー民謡				
29	雨の露	〃	〃	〃	〃					
30	玉の宮	G	〃	〃	稲垣千頌・里見義	芝葛鎮				
31	大和撫子	〃	〃	〃	稲垣千頌	芝葛鎮				
32	五常の歌	D	〃	〃	孟子疎支公圃より	メーソン				
33	五倫の歌	F	〃	〃	〃					
	(第二編)									
34	鳥の声	G	3/4	〃	〃		NMR I・NMC I	Winter adieu		
35	霞か雲か	D	3/4	〃	加部巖夫	ドイツ民謡**	NMR I・NMC I	Spring Song		
36	年たつけさ	〃	3/4	〃	〃	ネーグリ**	NMR I・NMC I	The Rising Sun	C	
37	かすめる空	F	3/4	〃	〃	Schade	NMR II	The rain		
38	燕	〃	3/4	〃	〃					
39	鏡なるす	日本附	3/4	〃	里見義	芝葛鎮				
40	岩もる水	C	3/4	〃	〃		NMR II			
41	岸の桜	G	〃	〃	〃					
42	遊狐	A	3/4	〃	〃					
43	みたにの奥	d	3/4	〃	〃					
44	皇師国	日本附	3/4	〃	〃	伊沢修二				
45	栄ゆく師代	G	〃	〃	加部巖夫	ポルトガル曲?				

	曲名	調	拍子	声部	作詩者	作曲者	出典資料	原曲名	歌詞草稿	備考
46	五日の風	A	%	単	加部 巖夫	ロベルト・フラン(スコットランド)				
47	天津の曲	日本音階	%	単						
48	太平の曲	F	%	3輪	里見 義	米人 ケラル	NMR I・NMC I	Hark! The distant clock	C	
49	みでらの鐘の音 (第三編)	C	%	単			TS	Summer joys are o'er		
50	やよ御民	G	%	単						
51	春の夜	F	%	単						
52	なみ風	F	%	単						
53	あふげば草	E	%	単						
54	雲	F	%	単	里見 義	J. W. Calcott	TS (43)	The clouds that sail o'er the hill	ABC	
55	草の都	Es	%	単						
56	才女	C	%	単		スコット夫人				
57	母のおもひ	D	%	単						
58	めぐる車	g	%	単						
59	墳秋の夕暮	d	%	単						
60	古秋の夕暮	f	%	単						
61	古秋の夕暮	a-c	%	単→2						
62	富士筑波	e	%	2				俗曲(黒髪)の始めと終り		
63	園生の梅	日本音階	%	2				事組唄		
64	園生の梅	日本音階	%	2				種楽唱歌		
65	四季の月	%	%	単						
66	白蓮白	%	%	単				種楽唱歌		
67	学小枝	C	%	2輪						
68	小船	G	%	2輪						
69	小船	D	%	4輪	里見 義		FS		ABC	歌詞草稿題なし
70	小船	%	%	3輪					ABC	歌詞草稿Cは2行のみ
71	小船	G	%	3輪						
72	小船	%	%	3輪						
73	誠は人の道	F	%	2合	里見 義 ?	モーツアルト	NMR II・NMC II	Trust and Honesty	C	原曲は《魔笛》のパパゲーノのアリア。英詞はMrs. Shinder
74	千里の道	As	%	2合	里見 義		NMR II・NMC II	Sowing Flowers	C	歌詞草稿題なし
75	春の野	As	%	2合			NMR II・NMC II	Arrival of spring	BC	歌詞草稿題なし
76	瑞しわれ	A	%	2合		ドイツ民謡	NMR II・NMC II	The evening twilight	C	歌詞草稿題なし
77	瑞しわれ	D	%	2合	里見 義		NMR II・NMC II	Evening song	C	歌詞草稿題なし
78	瑞しわれ	E	%	2合		アイルランド民謡?	FS (148)	The last rose of summer	ABC	ABCの各段階が完全に残っている。原詩はトーマス・ムーア
79	忠臣	D	%	2合					ABC	原曲はスペイン歌曲Juanita (遺跡)
80	千草の花	a	%	2合	里見 義		NMC II	Autumn Song	BC	草稿の題は《秋色》
81	きのふけふ	a	%	2合						
82	頭の花	g	%	2合						
83	さけ花	C	%	3合						
84	高嶺	G	%	3合						
85	四の時	C	%	3合						
86	花の月	Es	%	3合						
87	治る御代	D	%	3合		R. P. Lambilotte	NMC III	As the dewy shades	BC	草稿の題は《愛国》
88	祝へ吾君を	G	%	3合	里見 義		NMC III	Song of the Fatherland	BC	原題Heidenröslein。原詩Goethe
89	花鳥	F	%	3合	里見 義	ウェルナー	NMC III	The wild rose	BC	
90	心は玉	C	%	3合						
91	招魂	Es	%	3合						

注 NMR=L. W. Mason: National Music Reader  
 NMC=L. W. Mason: National Music Chart  
 TS = The Training School Song Book  
 FS = The Franklin Square Song Collection